



Title	「現代日本の開化」と和歌山
Author(s)	恩田, 雅和
Citation	阪大近代文学研究. 2006, 4, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92635
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「現代日本の開化」と和歌山

恩田 雅和

はじめに

夏目漱石が明治四十四（一九一）年八月十五日、和歌山県会議事堂で行った講演「現代日本の開化」は、漱石が同時期に関西を巡回して行った講演の一つである。他の三地域で行った講演と比べても、従来より重要視され言及されることが多い内容である⁽¹⁾。

しかし、講演の行われた場所、和歌山との関わりで論じられる機会は、これまでは少なかったのではないだろうか。本稿は、漱石が来演した当時の和歌山県教育界の一端をうかがい、漱石がどのような意識を持って講演に臨んだのか探ってみたい。

一

『朝日講演集』⁽²⁾によると、大阪朝日新聞主催の講演会は、

三班に分かれて開催された。

第一班は、明治四十四年七月二十三日から二十七日で、兵庫県内の龍野、姫路、加古川、豊岡、城崎の五か所を回った。講師は西村天囚、石橋白羊、花田比露思、藤沢一燈の四人だが、花田は龍野と城崎には同行しなかった。

第二班が同年八月三日から十日で、岡山、津山、福山、尾道、広島、呉、竹原という、岡山、広島両県にまたがる七か所を巡った。講師は木崎好尚、石橋白羊、本多雪堂、内藤湖南の四人で、石橋は、広島までの同行で終わり、内藤は尾道から加わった。

そして第三班が八月十三日から十八日で、初日の十三日は明石公会堂だった。西村白虹、牧放浪の順で登壇し、最後に漱石が「道楽と職業」と題し講演した。十五日が和歌山県会議事堂で、後醍醐院芦山、牧に続いて、漱石がしめくりに「現代日本の開化」を話した。十七日堺高等女学校講堂では、磯野秋渚、高原蟹堂に次いで漱石は「中味と形式」について話

す。最終日の十八日は大阪市公会堂で、大団円ということで一挙に五人が講演し、蟹堂、天囚のあと漱石が現われ「文藝と道徳」を話し、その後も雪堂、白羊と続いた。

このように同年の大阪朝日の講演会は、七月二十三日から八月十八日までおよそひと月近くにわたつていて、聴衆はどの地域とも「盛況を呈し」ていた。特に漱石目当ての聴衆は多かつたようで、明石は「定刻は一時半と云ふに一時には早くも聴衆堂に満ち」、大阪市では「定刻前より聴衆潮の如く、階上階下は勿論、演壇の前後までも立錫の地なく危険を慮りて門を閉づる事三回、七時に至りて遂に一切の入場を拒絶する」有様だった。和歌山も例外ではなく、「聴衆が知事以下高等官、県市議員、実業家、僧侶、学生等各種の階級に互りしは珍らしく、郡部より来れるものも亦多く、千名余に上り頗る盛況を呈し」ていたのだった。

さて、この三班に分かれて催された講演会だったが、講師の漱石は、日程や土地などにどのような希望を持っていたのだろうか。明治四十四年七月二十六日付で主催する大阪朝日新聞の長谷川如是閑に宛てた漱石の書簡³がある。

拝復度々御手数恐入候が出来るなら十日から十五日の間に願ひ度候夫から和歌山などはまだ行つた事がないからどうか其方へ向けて頂き度候 講演も卓上演説のやうにそこで好加減な愛嬌を振り蒔くなら小生には其才なく、又纏つた事を云ふには少し時間がかかり候、引受けても

御土産がなくては参られぬ故少々時間を請求致す訳に候（中略）講演は二三種こしらへる積に候必要なればそれを繰返してよきや、それから先達やつた「文芸と道徳」といふ奴をどこかで繰り返しても宜しきや、尤も少々長き故京都辺でやるならばと存じ居候 土地及び聴衆の種類等にて出来る丈斟酌致し度心得に候故場所及び会衆の性質など早く分れば好都合に候

これでわかることは、漱石自身、八月十日から十五日の日程を望み、和歌山を講演希望地に挙げていたことだった。それも、「御土産がなくては参られぬ故」、「少し時間」をかけて「纏つた事」を言う準備をしようとしている。そのために、如是閑に、「場所及び会衆の性質など早く」事前に教えて欲しいと請求しているのだった。

結果的に講演は四か所となり、漱石はそれぞれに内容を変えて話したが、最終地の大阪は、ちょうど二か月前長野県会議事院で講演した「教育と文芸」と重複するものだった。しかし、あとの三講演は用意周到に練られたと思われる内容のものであった。

二

同年八月一日付小宮豊隆宛の漱石の手紙³は、次のようにある。

小生九日頃東京を出て大坂^マに行き和歌山と明石と堺で講演をする事になり候、暑いの^マに氣の知れぬ事に候それが大阪の新聞のどの位の利益になり候や疑問に候

また八月八日付池辺三山宛書簡^⑤。

かねて申上候通小生阪朝催^シの講演会に出席のため九日か十日に彼地へ参り和歌山界明石三ヶ所巡業の上帰り候歸りに高野山に登り伊勢へ廻らうかと考へ候^⑥。

二つの書簡はいずれもまず大阪に行き、和歌山をはじめとして明石また堺と巡ることが記されている。漱石の頭の中には、この講演巡業は和歌山が初めの土地として刻まれていたのではないだろうか。

そこで想起されるのが、夏目鏡子が語り松岡譲が筆録した『漱石の思い出』^⑦である。その四十六「朝日講演」で、鏡子は「和歌ノ浦、堺、明石などで講演をすませまして、一番最後の大阪の講演に、お腹のぐあいが悪くて菓をのみのみこらえてすませたそうですが、とうとうそれが終わるとたおれてしまつて、宿へかえるなりすぐに床についてしまひました」と、ここでも和歌の浦を最初の地に挙げている。

鏡子はこの後、和歌の浦と飯蛸のことも述べている。

そのころ「大阪朝日」の社員でした長谷川如是閑さんなどがお見舞いにおいでになつて、どうも夏目君は不養生だ、この間和歌ノ浦で飯蛸をしきりにたべるから、そんな不消化ものをたべてだいじようぶですかと心配して注

意してあげても、だいじようぶだといつてはしきりに喰べるんだからということに、夏目も寝ながら、ナ—ニ、飯蛸のせいじゃないよと抗議を申し込んでおりました。

この『漱石の思い出』は、昭和三年から四年にかけて雑誌「改造」に連載されたものだが、漱石が飯蛸を食べ過ぎたエピソードは、漱石が死んだ直後の大正五年十二月十八日の「大阪朝日新聞」に長谷川如是閑自身が書き残していた。

君は明石に講演に來た時も、海岸の料理屋で、平気で何でも食べて、とうとう飯蛸まで平らげやうとしたから、私は猛烈に攻撃した。でもとうとう食つてしまつたやうだったが、講演を終つて東京へ帰らぬうちに、前の病氣が再発して、大阪の湯川病院へ入れられた。(中略)私は、身体に微動を与へることも禁じられて俯向になつたままの君を病室に見た時に、堪らなく焦ら立たしいほど、飯蛸を食つた君に反感を持たぬ訳に行かなかつた。で私は君を見るなり「だつて蛸なんかを食うんだもの」と云つた。君は夫でも医師から命じられた通り頭も動かさずに、「蛸ツていふだらうと思つた」と例の通り顔の筋肉だけ動かして笑つた^⑧。

如是閑は明石の海岸の料理店で漱石が飯蛸を食べたことを記していたが、どういふ行き違いか鏡子もまた松岡も、和歌の浦で漱石が飯蛸を食べ過ぎたと記録しているのである^⑨。これは、漱石が小宮豊隆や池辺三山に書き送つていたよう

に、鏡子ら身辺の人たちにもまず和歌山に講演に行くことを口にしていた結果、周囲も和歌山あるいは和歌の浦のイメージがこの巡回では強くなり、明石で食べた飯蛸も和歌の浦で食べたことに取り違えることになったためと推測される。

三

こうして漱石は、和歌山県会議事堂での講演会に臨んだ。その講演の前段である。

何もただボンヤリ演壇に登ったわけでもないのです、ここへ出て来るだけの用意は多少準備して参つたには違ひないのです。もつとも私がこの和歌山へ参るようになったのは当初からの計画ではなかったのですが、私の方で近畿地方を所望したので社の方では和歌山をその中へ割り振ってくれたのです。お蔭で私もまだ見ない土地や名所などを搜る便宜を得ましたのは好都合です。そのついでに演説をする——のではない演説のついでに玉津島だの紀三井寺などを見た訳でありますからこれらの故跡や名勝に対しても空手では参れません。お話をする題目はちゃんと東京表で極めて参りました。

漱石は講演をするのに際し、近畿地方を所望し、東京で話の内容を準備して題目はすでに決めてきたと明言している。この「現代日本の開化」も、偶然和歌山で行ったのではなく、

東京にいて和歌山で話すつもりで用意してきたものなのである。

しかしながら漱石は、和歌山へ来てから思いがけないことに会った。あるいはその一部は、東京でうすうす聞いていたのかもしれない。それは、菊池大麓が漱石が和歌山入りの日の朝、所も同じ和歌山県会議事堂で講演し、その菊池と宿舍が一緒になろうとしていたことである。その日の漱石の日記を見てみよう。

十四日〔月〕快晴

九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。和歌山からすぐ電車で和歌の浦に着。あしべやの別荘には菊池総長があるので、望海楼といふのにとまる。晩がた裏のエレベーターに上る。東洋第一海抜二百尺とある。岩山のいただきに茶店あり猿が二匹ある。キリといふ宿の仲居が一所にくる。裏へ下り玉津島明神の傍から電車に乗つて紀三井寺に参詣。牧氏と余は石段に降参す、薄暮の景色を見る。晩に白い蚊帳を釣り明け放して寝る夫でも寝苦しい。

朝起

涼しさや蚊帳の中より和歌の浦⁽⁶⁾

八月十四日に講演を終えた菊池大麓と翌十五日午後には講演を控えた漱石とが、あしべや別荘で同宿するめぐり合わせになつていたので。それを嫌った漱石は、あしべや別荘とほぼ隣

接する望海楼に移つて泊まつた¹⁾。

この菊池大麓は、安政二(一八五五)年三月十七日美作津山藩の洋学者箕作阮甫の養子秋坪の次男として生まれてゐた。父の実家菊池家をついで、慶応二年幕府に選ばれてイギリスに渡り、ケンブリッジ大学で数学と物理学を学んだ。明治十年帰朝して東京大学教授となり、文部次官などを経て三十一年東京帝国大学総長に就任。三十四年には文部大臣となり、翌年男爵を授けられた。そして四十一年から大正元年まで京都帝国大学総長を務めた¹²⁾。

つまり、和歌山を訪れた時の菊池は京大総長であり、この時慶応義塾塾長の鎌田栄吉とともに紀伊教育会主催の夏期講演会に臨んでいたのだった。この講演会は、八月十四日午前八時十五分から和歌山県会議事堂で開かれ、鎌田が「教育と国民性」、菊池が「教育勅語に就て」の題でそれぞれ話した。

八月十五日の「紀伊毎日新聞」はこれを詳しく報じていて、二人の講演要旨も掲載している。菊池は、「日本は開港以来未だ幾年ならざるに一躍して世界の一等国となりし」「欧州人が日本の急激的進歩を以て奇異の感を抱くと雖ども此は日本の長所、日本の固有の美のあるを知らざるによる、日本には教育勅語のあるあり、国民の道德を支配し之を維持せり、今後も此の長所、此の固有の美を榮存せざるべからず」などと述べた。

一方鎌田の講演は、紀伊教育会が講演の翌年明治四十五年

二月刊行の「紀伊教育」第207号で「教育と国民性の関係」と題して梗概を載せていた。一部を抄出する。

我日本は世界の一等国となりし以上将来国民教育を如何にすべきかを考ふべきは申すまでもなき事なり(中略)プラトール・アリストテレス等の老哲は「人類は最も御し難し」といひ、野獣の如き人を温良なる開明人となすの困難なるを嘆じ学者によりて、各其教化の方法は一にあらざるも、よく服従せしむるといふ事に一致せり、この服従たるや個人を認めず社会の圧迫によりてなさしむるものにして所謂社会主義たるなり、現今各地に於て社会主義云々するあるも、こは甚だ古き思想にして、今日に於ては必要なき陳腐の思想なり(中略)英国に於ては個人主義より變じて大に社会政策に熱中しつつあり、之れ英国に於ては、労働者組合其他の結社団結行はれしより、政府の考慮を費さしめたるものにして職工の養老金に関すること、貧民学校児童には衣食を供すること、質屋を官営となす等を行ひつつあり、之を以て文明なりと誇り日本には未だかかる政策なきを以て世界の人士は日本文明の鼎の輕重を問はんとするが如きは実に怪訝に堪えざる所なり、思へ、かかる政策は国家財政上に大なる影響を及ぼし且つ危険なる破壊思想を防遏し着実ならしめんとし却て惡傾向を助長誘発するものなるを

四

漱石は、菊池と鎌田の講演内容を一部耳にしていたようである。何よりも、漱石が講演する当日の地元新聞に要旨が大きく掲載されているのである。朝起きて、宿舍の望海楼でその記事を目にしていたことが容易に想像される。それより以上に、前夜に、地元の新聞記者から紀伊教育会の講演会の模様を聞かされていた可能性が高い。

前述の『朝日講演集』の「講演余録」「和歌の浦より上」で、牧放浪は、「紀伊毎日の千田井辺両君と晚餐を共にし、欄干に倚りて片男波の岸打つ音を聞きながら、漱石君の句涼しさや蚊帳の中より和歌の浦 四国路の方へなだれぬ雲の峰……」などと書き、漱石とともに紀伊毎日の二人の記者と晚餐を一緒にしたと報告していた。その晚餐の席で、千田、井辺両記者は今朝方実施された紀伊教育会の講演会についてしやべり、翌日の講演会を控えた漱石らは興味を持って、その講演内容を聞き質していたことが推測される。

「紀伊毎日新聞」の八月十五日と十六日の紙面に、各講演会の聴衆の数と来会の知名士が報じられている。それによると、紀伊教育会の講演は、「無慮千二百名」で、川上知事、加藤市長、古市師範学校長らが役員として出席、成富和中^⑬・菌部高女・東條農林各県立学校長、垂井商業会議所会頭、北島市会議長らが来会していた。これに対し、朝日記者講演

会は、「楼上楼下立錫の余地なく尚ほ溢れて廊下に佇むあり、其数無慮二千」の聴衆で、発起人として加藤市長、北島市会議長、垂井会頭らが出席、川上知事、成富・菌部・東條各県立学校長らも参集していた。

つまり、連日の講演会で朝日記者講演会の方の聴衆が圧倒的に多かったが、知名士をはじめとしてかなりの部分の聴衆が二日とも重なっていたのである。

漱石はそのあたりのことを意識し、講演の冒頭で次のように言うのである。

はなはだお暑いことで、こう暑くては多人数お寄合いになつて演説などお聴きになるのは定めしお苦しいだろうと思います。ことに承れば昨日も何か演説会があつたそう、で、そう同じ催しが続いてはいくら中らない保証のあるものでも多少は流行過の気味で、お聴きになるのもよほど御困難だろうとお察し申します。

また講演の終盤では、次のようにも語っている。

外国人に対して乃公の国には富士山があるというような馬鹿は今日は余りいわないようだが、戦争以後一等国になつたんだという高慢な声は随所に聞くようである^⑭。

中々気楽な見方をすれば出来るものだと思います。

これらのくだりは、前日の講演で、菊池が「日本は開港以来未だ幾年ならざるに一躍して世界の一等国となりし」と言い、鎌田が「我日本は世界の一等国となりし以上」などと言

っていることを明らかに批判している。そして最後に漱石は、菊池と鎌田の講演を聞いて前日満足だったろう聴衆に対し、こう述べてもいるのである。

苦い真実を臆面なく諸君の前にさらけ出して、幸福な諸君にたとい一時間たりとも不快の念を与えたのは重々お詫を申し上げますが、また私の述べ来った所もまた相当の論拠と応分の思索の結果から出た生真面目の意見であるという点にも御同情になつて悪い所は大目に見て頂きたいのであります。

漱石はこのようにして、「日本の現代の開化は外発的である」ことを主眼に置いて、現代日本を批判する論を展開した。この論を漱石はすでに東京で用意していたのだが、講演のアドリブで所々前日の同じ会場で行われた講演を意識していることをうかがわせていた。おそらく漱石は、七月二十六日長谷川如是閑に宛てた書簡の返信で、和歌山という「土地及び聴衆の種類」と「場所及び会衆の性質など」をいち早く知つたのではないだろうか。その結果、朝日講演会の前日に同じ会場において、紀伊教育会主催のかなり大がかりな夏期講演会が開催されることの報告を受けていたものと思われる。

五

紀伊教育会主催の夏期講習会は、すでに漱石が和歌山を訪

問する以前から毎年行われており、三年前の明治四十一年は八月十一日から二十日まで、高野山で開催された。この時の講師と演題は、次のようである。法学博士中村進午「法制經濟」、文学士藤井健次郎「倫理学」、藤澤南岳「老子」、林学博士川瀬善太郎「林学」。他に高野山管長密門有範ら三人による仏教講話¹⁶⁾。

明治四十二年も高野山で八月十一日から十七日まで開かれ、本王院を会場に、京都文科大学教授三浦周行「国史概論」、文学博士遠藤隆吉「社会心理と教育」、内務省書記官中川望「地方改良の精神的要件」、文部省視学官幣原坦「教育上の着眼点」などが講じられた¹⁷⁾。

明治四十三年は会場を紀南の田辺中学に移し、東京帝国大学農科大学教授本多静六「林業大意」、京都帝国大学文科大
学助教授高瀬武次郎「陽明学と修養上の疑問」、東京高等師範学校教授吉田静致「教育倫理学」、和歌山県技師上田長蔵「トラホームの話」が講じられた¹⁸⁾。

漱石が和歌山へ来た明治四十四年は会場が和歌山市の和歌山県会議事堂に変わり、やはり八月二十一日から二十八日まで女子大学講師高島平三郎や通俗教育調査委員巖谷季雄らを講師に講習会が催された。

そうすると、同年八月十四日、県会議事堂で菊池と鎌田を招いて開かれた講演会は、一日だけの臨時のものだったようにみえる。

同年七月三十日の「紀伊毎日新聞」は、「講習会の流行」という見出しで、「毎年夏期において講習会を開催することは一の流行となり来れり而して本年本県下において開かるべき講習会は左の如く多数を示せり歟ぶべき傾向といふべし」として、紀伊教育会の和歌山県内各支会での講習会予定を列挙している。このうち、「八月二十日頃より二十八日迄県会議事堂にて」の講習会も告知されていて、高島平三郎以外の講師は未定とされている。それに続き「尚同会主催にて八月十四日県会議事堂に於いて講演会を開き京都帝国大学総長菊池大麓男、鎌田慶応義塾長、井上哲次郎博士来演せらるべく何人にて参聴を許す由」とあった。

菊池と鎌田は確かに講演したが、半月前の時点ではもう一人井上哲次郎も講師の予定であったのだ。井上については、同紙同日の別の記事にも名前が見られた。「紀伊教育会東牟婁支会は八月八日より井上哲二郎博士（国民道德）吉村粉河中学校長（修身）を聘して講習会を開会す」。

この井上は結局八月十四日の講演会には講演しなかったのだが、東牟婁支会の講演会には確かに足を運んでいた。「紀伊毎日新聞」八月十二日に、「昨十一日古座町に於て開催の東牟婁郡夏期講習会講師井上哲次郎博士」と大きく上半身像の写真が掲載され、「十一日午前九時より開会し吉田同郡長の挨拶ありて講演に移り井上文学博士の講話あり聴衆者六百名盛会なり」とあった。井上は十一日から古座で講演し、十

四日の和歌山市での講演会には行かなかったのだが、十四日に和歌の浦には来ていた。「紀伊毎日新聞」の八月十五日、前日の夏期講演会を大きく報道している同じ面の下段「公人私人」欄に小さな記事があった。それによると、井上文学博士の一行は十四日午後一時三十分に新高知丸で和歌浦に着き、しばらく休憩し、五時和歌山市駅発の列車で大阪に向かった。その晩は大阪に泊まり、十五日夜梅田発の列車で石川県に向かうのだという。

菊池らの講演会は十四日の朝に開催されたのだから、午後一時三十分に和歌の浦に着いているのでは確かに間に合わなかった。しかし、その夜漱石らの一行が和歌の浦に宿泊することは井上は知っていたのだろうか。

漱石と井上との関連については、漱石が東京帝国大学の学生時に、井上の講義を聴講していたことが挙げられる。明治二十五年六月十一日に作成したリポート「老子の哲学」は、井上に提出したものとみられている⁽¹⁹⁾。明治二十九年一月二十八日正岡子規に宛てた句稿のうち「永き日や韋陀を講ずる博士あり」に「井の哲の事」⁽²⁰⁾と添え書きしていた。また明治三十九年の断片に、「明治ノ三十九年ニハ過去ナシ。単ニ過去ナキノミナラズ又現在ナシ、只未来アルノミ。青年ノ之ヲ知ラザル可カラズ。子規。樗牛。伊藤博文。井上哲二郎。三井。岩崎」⁽²¹⁾と書きつけた。さらに、『草枕』（明治三十九年九月）は、意識論を中心に分析すると、井上が講義で

取りあげていたサーンキヤ哲学と構成も含めて符合する点が多いといわれている²¹⁾。

六

それでは井上哲次郎は、古座でどんな講演をしたのであろうか。「紀伊毎日新聞」八月十五日に、「東郡夏期講習会閉了」の見出しで一部が紹介されていた。それは、「古座電報（十三日）」となっていて、「井上博士の第三日講演会は本日（十三日）より開会十一時半を以て終了夫より古座町正念寺において同町婦人のため一場の講演をなし曰く婦人は第一徳操を重んぜざるべからず徳操なき婦人は如何に美貌にして智識あるものと雖ども尊しとするに足らず又単に徳操のみありて智識なきものは之亦少しも尊しとするに足らざるのみか其の徳操をして益々光を放たしむる能はざれば此両者を是非併立せしめざるべからず夫に就ては婦人会の如き団体を作るの必要ありと結び午後一時終了」とある。

井上は古座で十一日から三日間にわたり講習会の講師を務め、最終日に地元婦人のために講演していた。その要点は、徳操を第一に訴えかけ、知識とともに両者を併せ持てと呼びかけているものだった。七月三十日の記事でも、井上は国民道徳を話すような紹介のされ方をしているが、ここで思い起こされるのが大逆事件で幸徳秋水らが処刑された直後に行っ

た井上の講演内容である。陽明学者井上哲次郎を「国民道徳」の面からとらえ直した大橋健二は、その著書²²⁾でこの時の井上の講演を解説している。

幸徳秋水、奥宮健之らが処刑（一月二十四日）された翌二月六日、国学院大学で無政府主義撲滅のための「大逆事件に関する立国大本講演会」が開かれている。

東亜報国会の花田仲之介陸軍中佐らが開催したもので、講演者として、井上哲次郎、渋沢栄一、三宅雪嶺らがまねかれた。壇上に立った井上は、「陽明学と仏国革命思想と社会主義の危険なこと」を論じた。奥宮健之の父（奥宮健齋）が有名な陽明学者だったという理由で「陽明の学説は、幸徳の師、故兆民居士が翻訳したルソーと均しく危険だ」と難じたのである。

天皇制国家の御用学者であった井上哲次郎にとり、陽明学は国民道徳の補強材としての価値でしかなかったことが分かる。いわばご都合主義の陽明学にすぎなかった²³⁾。

この井上の講演が明治四十四年二月六日。そして、和歌山県の古座を訪れ講演したのが、同年八月十一日から十三日、ちょうど半年後のことである。古座でも、国学院大学で行ったものと同主旨が話されたことが強く想像される。なぜなら、古座のある東牟婁地方で大逆事件という大きな騒動が前年から起きていたからである。

大逆事件は、明治四十三年五月二十五日、宮下太吉が長野県松本署に逮捕されたのが検挙の始まりといわれている。首謀者とみられた幸徳秋水が湯河原で拘引されたのが六月一日で、和歌山県では大石誠之助が六月三日に検挙された。その後、成石平四郎が逮捕され、高木顕明、峯尾節堂がつかまるなど、大石周辺にいた者たちがあわせて六人拘束された。この六人はいずれも新宮とその周辺に居住していたため、事件では新宮グループあるいは紀州グループと称された²⁸。

大逆事件で処刑されたのは二十六人に及んだが、そのうち六人も紀州グループが含まれていたのは異常といつてもいい割合である。明治四十四年一月十八日に判決が出て、早くも一月二十四日十一人に死刑が執行され、二十五日ただ一人の女性菅野スガにも死刑がくだった。紀州グループでは大石と成石平四郎が刑死し、あとの高木、峯尾、成石勘三郎、崎久保誓一の四人は無期徒刑であった。

大石と高木、峯尾が住んでいた新宮、成石兄弟の出身だった請川は、いずれも東牟婁郡内にある。処刑から半年余りたつても事件の恐怖のさめやらぬ土地に、いわば「天皇制国家の御用学者」井上哲次郎がわざわざ一人乗り込んでした話といえは、おおかた想像がつくだろう。

井上が講師の一人として予定されていた八月十四日の県会議事堂の講演会でさえも、そうみると大逆事件関連の様相を帯びてくる。先に引用したように、鎌田栄吉²⁹は、「現今各地に於て社会主義を云々するあるも、こは甚だ古き思想」と言い、「かかる政策は国家財政上に大なる影響を及ぼし且つ危険なる破壊思想」とまで述べていた。菊池も、「日本には教育勅語のあるあり、国民の道徳を支配し之を維持せり」と教育勅語の美点を強調していた。先の大橋健二の著書³⁰によれば、「井上が執筆したものに、戦前、国民道徳として日本人の精神的支柱とされた『教育勅語』（明治二十三年）の公的解説書『勅語衍義』（同）があり、「天皇制国家における国民の在り方」国民道徳（臣民道徳）を鼓吹した」そうである。この教育勅語を国民道徳の柱にするという点において、菊池大麓と井上哲次郎の思想は一致し、講演会のねらいも透けて見えてくる。

このようにみてみると、八月十四日の講演会自体が突発的なものに対応する臨時開催の意味合いが強いように思えるが、井上は大逆事件の渦中近くの土地で催された紀伊教育会東牟婁支会³¹の講演会の方をより重視して一人赴き、胸中を語ったのであろう。

紀伊教育会の研究を続ける馬場一博の論文³²によれば、「歴代の県知事が『紀伊教育会』からの依頼をうけて在任期間中に紀伊教育会総裁に就任し、「発足当初から県行政との関連

の深さが推察される」のが、当時の紀伊教育会であった。そして、「明治四十四年六月三十日に「教育奨励規程」が制定されて、学校や教育会等の教育団体に対する事業補助金の制度が創立されて以降の金額の急増ぶり」が目立ち、明治四十四年は前年の七〇〇円から一挙倍の一四〇〇円に県費補助がはねあがった。これは、「教員を対象とした夏期講習会や一般を対象とした通俗教育講演会の開催、体育事業の奨励等のために交付されたものが多く、県としては、「紀伊教育会」を通じて教育施策の実現を図るという側面があった」とする。実際その年、ひとつの流行となると新聞に書かれた夏期講習会だったが、倍増された県費を県内各所の催しで使ったことがうかがえる。そしてその背景には、その年一月に処刑された紀州グループの存在があり、その事件を鎮静化させ、国民道徳を浸透させるためにも講習会をできるだけ多く開催させるねらいのあったことが考えられるのである。

八

ところで漱石が毛嫌いした菊池大麓と漱石とは、どのような関係にあったのだろうか。

漱石と大学予備門時に同期だった太田達人は、「予備門時代の漱石」²⁸を書き残している。

私は大観音の傍へ移る前に、本郷の真砂町に下宿してゐ

ました。私の下宿は四辻の一角にあつて、その筋向ふの角屋敷が菊池大麓さんのお邸でした。（中略）その下宿まで、夏になると、夏目君は毎日のやうに早稲田から出てく歩いて来て、私を誘ひ出した上、又二人で一緒にくつて、両国の水泳場まで通つたものでした。帰りに又わざわざ真砂町の下宿へ立ち寄つて、さんざ話してから戻つて行く。

この当時、菊池は東京帝大教授で、予備門学生の漱石は、太田の下宿への行き帰りに菊池の邸そばを必ず目にして通つていたことになる。

このあと十年余りを経て、漱石が菊池と関わりを持つ日が訪れる。それは、イギリス留学した二年目の明治三十四年七月二十二日、ロンドンの宿所で時の文部大臣菊池大麓に宛てて、「英国留学申報書一」²⁹を作成し提出していた。「英国留学申報書二」は、留学を終えて帰朝する直前、明治三十六年一月三日の日付で「宿所ロンドン 第五高等学校教授 夏目金之助」の名で「文部大臣理学博士 菊池大麓殿」³⁰として書かれていた。

それから八年が経過して、漱石と菊池は和歌の浦で同宿する間際にまで接近したのである。しかし、同宿は漱石によって避けられた。

実はこの頃、菊池が総長を務める京都帝国大学ではちょっとした騒ぎがもちあがついて、菊池は收拾するのに東奔西

走っていた。それは、同年六月上旬京大教授の岡村司博士が岐阜県教育会総会で「親族と家族」と題して講演した。この講演が問題となり、「警察は博士を社会主義者で、家族制度を破壊しようとするものとして、大騒ぎになった」^①。文部省は七月六日小松原文相以下一時間にわたって密議して、至急取調べることにし、八日に菊池総長が上京して事情を説明した。他方岡村は、「社会主義を研究している者を社会主義者と云うのは片腹痛い、我が国の家族制度は昔の遺風で、今は何の意味もない、家に代るべきものを作りあげなければならない。だが幸徳派云々とか内相文相を馬鹿者とかは云ったことはない。当局の神経過敏には驚く、と新聞記者に話している」。

菊池は文相に面会した際、岡村が「もし懲戒免官となると、政府当局を罵倒した不謹慎の言語によつて懲罰されたとは思わないで、彼の家族主義、祖先崇拜を批評した思想、つまり学問上の批評に対して嚴重処分されたものと考えてであらうし、それがため遂に家族主義、祖先崇拜に向つて論鋒を向けて攻撃するようになり、それと同時に新聞も政府攻撃の好材料を得て、書きたてることになり、それでは政府のため得策とは云えず、また家族主義のためにもまことに遺憾だから懲戒免官のような過酷な処分のないように希望する」と伝えた。これに対し、東大の一教授が「一体菊池総長の腰が弱い、東大でも時々文部省から教授の言動について兎や角いわれて

来るそうだが浜尾総長が遠慮なくはねつけてしまうものだから問題にはならないのだ」(『大阪毎日新聞』七月二十三日)と評した。また京大の某教授は「大阪毎日新聞」七月十九日に、「かくのごとき問題にて大学教授を譴責するとか処分するとか云うことは、露西亞以外に少なくとも文明国に先例ありし事を聞かず。日本の言論圧迫は、ようやく露西亞に近づかんとするの傾向あり。しかれども人心の抑え難きは東西古今皆しかり、(中略)しかして政府者これを悟らず、依然として自己の言う所はすべて国民の欲する所、これに批評を試みるものは、故意に国民の帰嚮を破壊せんとするいわゆる危険思想なりと独断して、批評者を弾圧し、迫害せんとするに至る。弾圧にしていよいよ強からんか、反動もいよいよ激しからざるを得ず」と語った。

この発言にも驚いた菊池は、記事の出た当日文相に会い、「ともかく首相に対して相すまないにつき、首相に申し上げ且つ辞表を差出してくれ」と言つて辞表を提出した。

立花隆は『天皇と東大上』^②の第十五章「山川健次郎と超能力者・千里眼事件」で『嵐のなかの百年』を多く引用し、この時の菊池について論評している。

自分のほうが文部大臣として大先輩(六代前)なのに、この卑屈な態度は何だといいたくなるほど、菊池の態度は情けない。たかが匿名の一教授が新聞記者に問われて政府批判の言を吐いたというだけのことではないか。ど

う考えても、それが大学総長の辞表提出の理由になるとは思えない。

大学で何かことが起きたときに、総長にどのような人物が座っているかで、事態の展開がぜんぜんちがったものになるということがこれでわかるだろう。

この京大をめぐる騒ぎは、大逆事件の処刑者が出てからまだ五か月から六か月しか経っておらず、発端となった家族制度の講演や幸徳派云々、政府攻撃、言論圧迫、危険思想などの発言は、大逆事件を踏まえていることは明らかで、事件の影が依然としてつきまとっていることが察せられる。菊池自身も何度も文相に面会し、差し戻しはされているものの、七月十九日には辞表を提出もしていた。そんな身辺が騒然としていた頃の翌八月十四日和歌山市での講演会に臨んでいたわけである⁽³³⁾。

九

漱石は東京にいて、京大をめぐる一連の騒動は新聞紙上で目にしていたはずである。この騒ぎで菊池総長があわてふためいて弱腰になり、辞表を提出して卑屈な態度で終始していたことも先刻承知していたのではないだろうか。その人がかつて自身がイギリスに滞在中、二度にわたって「英国留学申報書」を書き送った文部大臣であったことも含めて。

またあの「井の哲」が二月に国学院大学で講演し、今また和歌山で講演することも、事前に知らされていたのではないかと思われる。

漱石は和歌山で講演した翌々日の八月十七日堺高等女学校講堂で「中味と形式」と題して講演した。和歌山で言い足りなかったことを、ここでは補足するように語っているようにもみえる。

・今この順序主客を逆まにしてあらかじめ一種の形式を事実より前に備えておいて、その形式から我々の生活を割出そうとするならば、ある場合にはそこに変な無理が出なければならぬ。しかもその無理を遂行しようとするれば、学校なら騒動が起る、一国では革命が起る。政治にせよ教育にせよあるいは会社にせよ、わが朝日社のごとき新聞にあつてすらそうである。だから世間でもそう規則づくめにされちゃ堪らないとよくいいます。

・要するにかくのごとき社会を総べる形式というものはどうしても変えなければ社会が動いて行かない。乱れる、纏まらないということに帰着するだろうと思う。自分の妻女に対してさえも前申した通りである。否わが家の下女に対しても昔とは趣きが違ふならば、教育者が一般の学生に向い、政府が一般の人民に対するのも無論手心がなければならぬはずである。内容の変化に注意もなく頓着もなく、一定不変の型を立てて、そうしてその型は

ただ在来あるからという意味で、またその型を自分が好んでいるというだけで、そうして傍観者たる学者のような態度を以て、相手の生活の内容に自分が触れることなしに推して行ったならば危ない。

この講演について瀬沼茂樹は、「この評論は当時流行したオイケンにたいする批判位に軽くみられて、注目されることの少なかったものであるが、その背景に大逆事件や社会主義の問題がある貴重な言論である。秩序を尊重する保守的形式主義者であった森鷗外は立場上社会問題にも直接に触れたが、漸進的改革主義者であった夏目漱石はこれに論及するところがなかった。しかしこの事件に関連し、個人主義や自然主義が危険思想視されて禁圧されると知ると、社会進化の上からも、中味に応じて外形も変らねばならぬという重大な発言を穩健に主張し、その真面目をみせた貴重な評論であった」³⁴⁾と背後に大逆事件が隠されていることを指摘している。

また伊豆利彦は『漱石と天皇制』³⁵⁾で「幸徳らの事件は『修善寺の大患』と重なっており、漱石におけるこの事件の意味は見失われがちである」としながらも、一九一一年二月以降に「連続的に大量の評論を発表したのは、漱石の生涯でこの時だけである」と大逆事件で処刑者の出た翌月からの時期を注目している。そして六月の長野と高田の講演、八月の関西巡回講演に触れ、「何がこの時期の漱石をこのように激しい言論活動に駆りたてたのだろうか。それを『大逆』事件と関

係がなかったと考えることは出来ない」としている。

おわりに

漱石は「大逆事件には一度も触れていない」³⁶⁾「大逆事件について、漱石は一切沈黙した」³⁷⁾などの先行研究があったが、漱石は大逆事件にはある程度の意識を持って関西巡回講演に臨んだことを探った。殊に和歌山は、その年に紀州グループの大量の処刑者が輩出した土地であっただけに、漱石も他の場所とは違う気分を抱いて訪れたことを考察してみた。その一つの方法として、紀伊教育会とそこが主催した講演会を通して検証を試みた。なお紀州グループのうちの二人を弁護した平出修と漱石との関わりもあったのだが、その検討は別稿に譲りたい。

注

(1) たとえば『漱石文明論集』(一九八六年十月岩波文庫)の編者である三好行雄は、その解説で「漱石の数多い文明論の白眉は、やはり、『現代日本の開化』であろう」と述べている。また佐藤泉は、『NHK文化セミナー明治文学をよむ 夏目漱石片付かない物語』(二〇〇〇年十月日本放送出版協会)で、「現代日本の開化」の「講演録は高校の国語教科書の教材にもなって、

一般的にも広く知られている。小説家・漱石の小説ではない代
表作と言っている」と言う。

(2) 明治四十四年十一月朝日新聞合資会社

(3) 『漱石全集』第二十五卷（一九九六年九月岩波書店）

(4) 注（3）と同じ

(5) 注（3）と同じ

(6) 注（3）と同じ。この書簡は、『行人』（大正元年十二月六
日〜大正二年四月七日）第一章「友だち」の一「自分はここへ
来る一週間前ある友だちと約束をして、今から十日以内に阪地
で落ち合おう、そうしていつしよに高野登りをやろう、もし時
日が許すなら、伊勢から名古屋へ回ろう、と取りきめた」に反
映されている。

(7) 昭和四十一年三月角川文庫

(8) 『漱石全集』別巻（一九九六年二月岩波書店）

(9) 『漱石の思い出』のこの部分に拠ったと思われる半藤一利『漱
石俳句探偵帖』（平成十一年十一月角川選書）の「食いしん坊と
いう話」がある。「修善寺大患の翌年の夏、漱石は朝日新聞社主
催の講演のために明石、堺、和歌山、大阪と関西の諸市をめぐ
り歩いた。大阪で講演を終えたのち、またまた体調をくずし大
阪の病院に入院する、という騒動があった。暑中の旅の強行軍
の疲れが胃にひびいたと一般には解されている。たしかに、
そうにちがいはあるまいが、探偵として少しくさぐつてみたら、
原因は別にあるような、そっちのほうが正しいような気がして

いる。それがなんと、和歌浦で飯蛸を食いすぎたため。なんと
も吹きだしたくなるような話であるが、まず間違いないと確信
している」

(10) 『漱石全集』（昭和四十一年十一月 岩波書店）。エレベータ
ーに上ったくだりなど、「現代日本の開化」に反映され、『行人』
にも取り込まれていることは周知の通りである。

(11) 『朝日講演集』の「講演余録」「和歌の浦より下」に、和歌
山入りの遅れた講師の一人後醍醐院芦山は事情がわからずに、「迷
児の吾輩は、只独り寂しく片男波の子守歌に縋されながら、芦
辺屋の広間に一夜を明かした」と記している。

(12) 『日本近現代人名辞典』（二〇〇一年七月吉川弘文館）によ
る。

(13) 和歌山中学

(14) 注（1）で引いた『漱石文明論集』の「現代日本の開化」
注解でもあるように、『三四郎』（明治四十一年九月一日〜十二
月二十九日）の第一章に広田先生にこの意見を言わせている。

(15) 『紀伊教育』第170号明治四十一年八月紀伊教育会

(16) 『高野山夏期講習会講演集』（明治四十三年八月紀伊教育会）

(17) 『田辺夏期講演会講演集』（明治四十三年十一月紀伊教育会）

(18) 『漱石全集』第二十六卷（一九九六年十二月岩波書店）

(19) 『漱石全集』第十七卷（一九九六年一月岩波書店）に、「井
の哲」は、東京帝国大学哲学科教授であった井上哲次郎のことと
ある。

(20) 『漱石全集』第十九卷（一九九五年十一月岩波書店）

(21) 『漱石全集』第三卷（一九九四年二月岩波書店）の「草枕」注解による。

(22) 『良心と至誠の精神史 日本陽明学の近現代』（平成十一年十一月勉誠出版）第二章「国家主義と至誠主義」

(23) この時の井上の講演について、南方熊楠が明治四十四年六月二十七日の「和歌山新報」で「王陽明と平田篤胤」と題し、非難の声をあげている。「東京の新聞で見ると、前日花田氏が催せし演説会へ飛び入りの井上哲次郎博士は、奥宮健之の父が王陽明学者だったから、陽明の学説は、幸徳の師、故兆民居士が翻訳したルソーと均しく危険だと述べられし由。前年『国光』という雑誌に、大分えらい学者が、藤樹、蕃山、南洲から、大塩平八郎、雲井竜雄、さては頭山満君までも引き出して、わが邦の英雄多くは王氏の学に私淑せりと賞美されたが、今日また、奥宮の父一人の例から陽明の学は危険だとは、『義経記』『曾我物語』の文句で、「言わば言わるるものかな」と言わざるを得ず。」

『南方熊楠全集』第六卷（一九七三年六月平凡社）

(24) 絲屋寿雄『大石誠之助 大逆事件の犠牲者』（昭和四十六年九月講書房）、佐木隆三『小説 大逆事件』（二〇〇四年二月文春文庫）

(25) 鎌田の経歴も際立っている。紀州藩士の子として安政四年和歌山で生まれた鎌田は、明治七年第一回選拔生で慶応義塾に入塾。明治三十一年から大正十一年まで二十四年の長きにわた

り慶応義塾塾長に在任した。これは塾長の最長不倒記録で、大正十一年文部大臣に就任した。『別冊太陽30号 慶応義塾百人』一九八〇年三月平凡社などによる）近い将来文部大臣となる塾長と文部大臣を経験した現役総長が講師として顔を揃えた講演会は、文部行政への影響力の大きさからいって、その異様さが突出しているようにうつる。

(26) 注(19)と同じ

(27) 「紀伊教育会」と雑誌『紀伊教育』（「和歌山地方史研究」42号 二〇〇二年三月和歌山地方史研究会）

(28) 『漱石全集』（昭和十年版）月報第三号、第四号（昭和十一年一月、同二月岩波書店）に発表され、注(8)と同じに再録された。

(29) 注(15)と同じ

(30) 注(15)と同じ

(31) 向坂逸郎編著『嵐のなかの百年』（一九五二年十二月勁草書房 第四章磯野誠一「法学と社会主義」）。以下本文の引用はすべて第四章による

(32) 二〇〇五年十二月文藝春秋

(33) 「紀伊毎日新聞」明治四十四年八月十一日によると、十四日の講演会を前に菊池は十一日高野山に登り、十二日滞在し、「十三日下山午後和歌山着直ちに和歌浦あしべ屋妹背別荘に投ずる」とある。

(34) 夏目漱石『私の個人主義』（昭和五十三年八月講談社学術文

庫) 解説

(35) 一九八九年九月有精堂

(36) 森山重雄『大逆事件Ⅱ文学作家論』(一九八〇年三月三一書房)「余録」

(37) 牧村健一郎『新聞記者夏目漱石』(二〇〇五年六月平凡社新書)

※「現代日本の開化」及び「中味と形式」の本文引用は、『私の個人主義』(昭和五十三年八月講談社学術文庫)に拠った。また引用箇所の漢字旧字体はすべて新字体に直した。

【付記】本稿は、2005年3月26日和歌の浦アート・キューブ

で催されたシンポジウム「漱石の和歌山講演『現代日本の開化』をめぐって」(パネリスト多田道夫和歌山大学名誉教授、恩田雅和、梶川哲司和歌山県立向陽高校教諭、司会村瀬憲夫近畿大学教授)に負うところが多い。このシンポジウムの前後、多田、梶川両氏とともにうちあわせを繰り返して論議し、多大なるアドバイスもいただいた。両氏に学恩を感謝する。また和歌山県教育委員会の馬場一博氏には、紀伊教育会の資料に関し、懇切なおたよりを再三頂戴した。心からお礼を申し上げたい。

(おんだまさかず／本学大学院博士前期課程)